

絶筆書評



小熊英一

「単一民族神話の起源」

日本人の
自画像の系譜

新曜社・三九四円 ISBN4-7885-0258-2

たいへん素晴らしい。

日本を単一民族国家だとみなす
じゅうらいの考え方は、まちがっ
ている。日本列島では、さまざま
な民族がまざりあつてきた。日本
人は、それら諸民族が混在するこ
とで形成されてきたのである……。

最近、こういう指摘を目にする
ことが、ふえてきた。単一民族説
を批判するのが、論壇的な流行に
なりつつある。

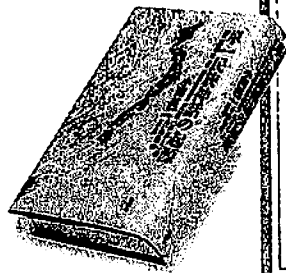
だから、私たちはどうしても、
ある臆断をもたされてしまう。昔
は、単一民族説が定説になっていた
んだな、と。

そう、たしかに、昔はそれが一

般通念として定着しきつていた。
すくなくとも、ここ半世紀ほどの
推移をながめているかぎり、そう
言える。古い単一民族説が、ちか
ごろおとろえ、多民族混在説にか
わりだしてきた。以上のような趨
勢があるのだと、思われる。

しかし、明治大正期の言論に目
をとすと、まったくちがった様
相が浮上する。一九世紀末―二〇
世紀前半には、日本人は多民族混
在説が、流布していた。大日本帝
国期には、むしろそちらのほうが
定説化されていたのである。

単一民族説が優勢になりだした



のは、敗戦後になってからであつ
た。それは、むしろ新しい、「戦後」
の議論だったのである。

えーつ、そうだったの。知らな
かったなあ。読者の多くは、その
ことにまず、ちよつとしたショッ
クをうけるだろう。そのショック

を導きの糸として、著者は日本民
族の言説史へ、読者をさそつてい
く。
私事にわたるが、私もよく似た
ような手をつかう。今日、常識と
されている通念に、ゆさぶりをか
ける。そのために、明治期の言論
などを呈示したりすることを、や
つてきた。

だから、著者のこの本にも、親
近感をいだいている。反感をいだ
く部分も、たぶんなにほどかは、
自己嫌悪のうらがえしなのだろう。
もつとも、著者にはある種の使
命感も、あるらしい。民族という
ものを考えなおす。そのための材
料を呈示したいという意欲が、読
みとれる。私のような、古い珍文
獣の紹介をおもしろがるディレッ
タントとは、ややちがう。まあ、
資質の相違ということか。
ともかくも、私が去年で一番刺
激をうけた本ではありました。

評・井上章一
text by Shoichi Inoue

ゆさぶりをかける